

道徳的価値の自覚を深める道徳の授業の工夫

－体験を生かして道徳的価値形成を図る指導－

糸満市立潮平小学校教諭 玉那覇 三千代

内容要約

道徳的価値の自覚を深めるために、体験を生かして価値形成を図る指導をした。「導入」で、本時で指導する内容（価値）に関する体験を書かせたワークシートを活用することで、自己の道徳的問題に気付かせた。「展開前段」で、葛藤場面を設定し、「話し合い」を取り入れることで、自分のこととして道徳的価値について深く考えさせた。「展開後段」で、改めて自己の道徳的問題を内省し、深められた価値を生活の中でどう生かしていくかワークシートに書かせることにより、道徳的価値を主体的に自覚させた。「終末」で、感動体験を取り入れることにより道徳的価値に対する実践意欲を高めさせた。

その結果、道徳的価値の自覚が深まった。

【キーワード】 道徳的価値 体験 道徳的問題 葛藤 話し合い 主体的 感動体験 実践意欲

目 次

I	テーマ設定の理由	21
II	研究内容	22
1	道徳的価値の自覚を深めるとは	22
2	体験を生かした指導について	23
3	体験を生かした授業の工夫	23
III	授業実践	25
1	主題名	25
2	資料名	25
3	主題について	25
4	本時の学習	26
5	授業仮説の検証	27
IV	研究の考察	28
1	自己の道徳的問題をとらえることができたか	28
2	道徳的価値について深く考えることができたか	28
3	道徳的価値を主体的に自覚できたか	29
4	道徳的価値に対する実践意欲を高めることができたか	30
V	研究の成果と今後の課題	30
1	研究の成果	30
2	今後の課題	30

＜小学校 道徳＞

道徳的価値の自覚を深める道徳の授業の工夫 ―体験を生かして道徳的価値形成を図る指導―

糸満市立潮平小学校教諭 玉那覇 三千代

I テーマ設定の理由

今日、家庭や地域の教育機能の低下、社会全体のモラルの低下、社会体験、自然体験の不足など様々な問題により、子どもたちの健全な発達には阻害され、道徳教育は、日本の教育の重要課題となっている。道徳教育は、人間としていかに生きるべきかを自ら問いかけ、その実現に向けて心豊かにたくましく生きることを求めるものである。また、道徳性は、よりよい道徳的行為を可能にする人格的特性であり、生まれたときから身に付けているものではなく、人間社会における様々な体験を通して学び、はぐくまれるものである。道徳の時間は、そうした体験のなかで気付いた様々な道徳的価値の大切さについて考え、自分とのかかわりで道徳的価値をとらえ、これを実践につなげる内面的な能力としての道徳的实践力を身に付ける場でなければならない。

しかし、これまでの道徳の時間における教育実践を振り返ると、資料を通して表層的な知的理解・判断にとどまり、児童の体験と道徳的価値を関連付けることが不十分だったため、道徳的価値の自覚を深めるまでに至らなかった。その原因として、一つめに「導入」で、児童の体験を想起させてはいたものの、その体験の中にある問題を自己の道徳的問題としてとらえさせていなかった。二つめに「展開」において、資料の登場人物に共感したり、批判したりするという話合いだけにとどまり、自分のこととして悩み、深く考える段階にまで至らなかった。三つめに「終末」において、教師の説話で終わることが多く画一的になり、価値に対する実践意欲を高めさせることができなかった。

このように考えていくと、「体験を生かして道徳的な価値を、子どもの内面にどのように形成させていくか。」が指導のポイントになる。そこで、本研究では、児童の道徳的価値の自覚を深めるため、学習者の立場から道徳的価値形成を図る授業を構築していきたい。その中で体験を生かした指導の工夫を図る。まず、「導入」として、事前に書かせた児童のワークシートを基に道徳的問題に気付かせ、自己の道徳的問題として受け止めさせる工夫をする。次に、「展開前段」で自分のこととして深く考えさせるために葛藤場面を設定し、「話合い」により多様な価値観に出会うことにより、道徳的価値について深く考えさせる。展開後段で、道徳的価値を主体的に自覚させるために、自己の道徳的問題を改めて内省し、深められた価値を生活の中でどう生かしていくかをワークシートに記入させる。最後に「終末」で、実践意欲を高めさせるために感動体験を取り入れる。

よって、本研究では、道徳の時間において、体験を生かして道徳的価値形成を図る指導をすることで、児童の道徳的価値の自覚を深めることができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

＜研究仮説＞

道徳の時間において、体験を生かして道徳的価値形成を図る指導を次のような手だてで行うならば、児童が道徳的価値を自らのこととして受け止め、道徳的価値の自覚を深めることができるであろう。

- 1 「導入」で、自己の道徳的問題に気付かせるために、本時で指導する内容（価値）に関する体験を事前に書かせたワークシートを活用する。
- 2 「展開前段」で自分のこととして道徳的価値について深く考えさせるために、葛藤場面を設定し、「話合い」を取り入れる。
- 3 「展開後段」で、道徳的価値を主体的に自覚させるために、改めて自己の道徳的問題を内省し、深められた価値を生活の中でどう生かしていくかをワークシートに書かせる。
- 4 「終末」で、道徳的価値に対する実践意欲を高めさせるために、感動体験を取り入れる。

Ⅱ 研究内容

1 道徳的価値の自覚を深めるとは

(1) 道徳的価値の自覚を深める

「小学校学習指導要領解説道徳編」において、「道徳的価値の自覚を深める」として次のように述べられている。

「道徳的価値の自覚については、発達段階において多様に考えられるが、次の三つの事柄を押さえておく必要がある。一つは、道徳的価値についての理解である。道徳的価値が人間らしさを表すものであるため、同時に人間理解や他者理解を深めていくようにする。二つは自分との関わりで道徳的価値がとらえられることである。そのことに合わせて自己理解を深めるようにする。三つは、道徳的価値を自分なりに発展させていく事への思いや課題が培われることである。その中で自己や社会の未来に夢や希望がもてるようにする。」とあり、道徳の時間においては、これらのことが、児童の実態に応じて、主体的になされるように様々な指導方法を工夫していくことが求められている。

本研究では、道徳的価値の自覚を深めるための授業の工夫として、「道徳的価値はどのように形成されていくか。」という学習者の立場から道徳の指導過程を構想する。

(2) 道徳的価値形成

廣川の「道徳価値形成過程」を生かして道徳の授業における道徳的価値形成過程を構想していくと図1のようになる。道徳的価値形成のプロセスは、問題性があるところに葛藤が生起し、その葛藤を克服することによってより高次の価値を指向し、さらに感動を通すことによって実践意欲のある態度形成へとつながるという道筋になる。

① 道徳的価値形成過程の各段階

ア 問題性

自己の体験を基に、自分との関わりで問題意識を持つことにより、自己の問題として主体的に、自覚的に受け止め、自己の課題として**意識化**していく。

導入の段階で、「自分は今までどうだったか。」「なぜできなかったか。」などを振り返らせる。

イ 葛藤性・価値指向性

人間が、「よりよく生きよう」とするならば、葛藤の場面を必ず通る。葛藤場面で、正しく強く生きぬこうとすることにより、より高次の自己へと価値指向していく。

展開前段の葛藤場面で、自分だったらどうするか**追体験化**させ、自分の問題として**主体化**させことにより、道徳的価値を深く考えさせる。

ウ 持続性

心情に訴え、深められた道徳的価値を継続し、**生活化**していくために、道徳的価値をどう生かし、これから自分なりにどう発展させていくかを考える。

展開後段で、これまでの自分を見つめ直し、深められた価値を生活の中でどう生かしていくかを考えさせる。

エ 感動性

価値指向性により形成されたより高い価値は、感動性に触れることにより、より強く自分の内面を揺さぶり、深く心に受け止められていく。

終末で、感動性を用意し、実践への**意欲化**を図る。

(道徳的価値形成過程)

感動性 ← 持続性 ← 価値指向性 ← 葛藤性 ← 問題性

(道徳の時間の内面化過程)

意欲化 ← 生活化 ← 主体化 ← 追体験化 ← 意識化

(道徳の時間の指導過程)

終末 ← 展開後段 ← 展開前段 ← 導入

図1 道徳的価値形成過程構想図

2 体験を生かした指導について

(1) 体験を生かした指導の重要性

児童が道徳的価値を主体的に形成するためには、児童が自分の生き方を振り返り、自己の道徳的問題に気付く、そして、道徳的価値について自分のこととして深く考え、感じ取った価値に基づいて今後の自分の生き方に生かすことが重要である。このように価値形成を図るために、道徳の授業で体験を生かすことが重要である。

(2) 道徳の授業に生かす体験

道徳の授業において重視する体験として、本研究では次の三つをあげる。

① 道徳的価値にかかわる生活体験

「道徳的価値にかかわる生活体験」とは、様々な道徳的価値に触れ、感じ、道徳性を身に付けるような体験である。価値形成過程において自己の道徳的問題に気付かせるためにその体験を生かす。

② 追体験的体験

「追体験的体験」とは、自分が直接体験していないことを、資料を基にイメージし、あたかも自分がその場にいるような形で状況をとらえることである。価値形成過程において、自分のこととして道徳的価値について深く考えさせるためにその体験を生かす。

③ 感動体験

「感動体験」とは、心を感じ、心を動かす体験である。心を動かされることによって今までの自分とはちがう何かを求めようとする変化が起こる。価値形成過程において、道徳的価値に対する実践意欲を高めさせるためにその体験を生かす。

3 体験を生かした授業の工夫

本研究では、体験を生かした指導法の工夫として、次の点から研究を進めていく。

(1) 「ワークシート」への記録

教師は、児童がねらいとする道徳的価値についてどのような体験があつて、どのように感じているかを事前に把握することが重要である。そのために、事前に、児童に生活体験の中で、道徳の時間を取り扱う内容（価値）に関する考え方や経験などをワークシートに記録させる。また、道徳の時間の展開前段の葛藤場面、展開後段で改めて自己の道徳問題を内省し生活の中でどう生かしていくか、終末において実践意欲の高まりを確かめる際にもワークシートを活用する。授業の全段階で体験を生かした活動を取り入れ、ワークシートに書かせることにより、児童一人一人が、どのように体験とのかかわりで価値が形成されたのかがわかり、児童自身も自分の考えの変容を見ることができる。

(2) 葛藤場面の設定

指導過程の「展開前段」で「自分だったらどうするか。」という発問により自分が直接体験していない他人の体験を追体験し、自己の問題としてとらえさせるため、葛藤場面を設定する。資料を基に、実際に体験したことを思い出しながら道徳的価値について深く考え、自らの在り方や生き方を見つめることができる。

(3) 道徳的価値を深く考えさせるための「話し合い」

葛藤場面で選んだ行為に対する理由や根拠をもった意見を述べ合う「話し合い」を取り入れる。「話し合い」の中において、自分の考えを述べたり、より高次の他者の考えを理解することにより、道徳的価値を深く考えることができる。その「話し合い」を進める上で以下の点に留意して指導する。

① 話し合いのルール

資料1のように自分と相手の二つの視点からルールを決めた。自分の考えを本音で言える。自分の考え、人の考えを大切にするという基本的な心構えを確認した。

② 話形と座席の工夫

自分の気持ちを大切にする。 ・正直な気持ちをみんなに伝えよう。 ・自分はなぜそう思ったか自分の気持ちを見つめ、理由をつけて発表しよう。 友だちの意見を大切にする ・人の意見は最後まで聞く。 ・人の意見を笑わない。 ・自分の考えと比べ、理由をつけて発表しよう。

資料1 話し合いのルール

道徳的行為の根拠を意図的に述べさせるために、発表に話形を取り入れる。また、話形を取り入れることで、児童が自分と同じ意見か違う意見か、似ているところはどこか、人の意見に耳を傾けることにより道徳的価値について様々な考えに触れることができる。さらに、話合いがスムーズに行われる工夫として、座席をコの字型にする。

③ 簡易アナライザーの活用

葛藤場面で、どちらを選択したかの判断を意思表示し、他者の判断も把握できるために、簡易アナライザーを活用する。教師も一目で実態が把握でき、意図的指名もしやすくなる。

(4) 感動体験による意欲付け

児童は、頭だけでなく身体全体をつかって多くを学ぶ。児童は、においを嗅いだり音や声を聴いたり、実物を触ったり観察したりする感覚器官を働かせる学習で、いろいろなことを理解し、生きてはたらく知識としていく。本研究では「終末」で実践への意欲付けや態度形成をねらいとして、感動を与える資料や実物などによる感動体験を取り入れる。

(5) 「体験を生かした指導」を支える発問構成の工夫

表1 道徳的価値形成過程における発問の基本型

道徳授業は、教師と子どもの対話（発問－応答）であり、子ども同士の対話を通しての相互啓発過程である。さらに、自分を見つめる自分との対話（自問自答）がとても大切である。したがって実際の授業での発問は、ねらいとする価値を子ども一人一人に自らの道徳的問題として自覚させたり、話合いを方向付けたりする重要な働きを持つ。そこで、教師は、表1にある「道徳的価値形成過程における発問の基本型」にそって児童の実態や資料分析を基に児童の本音や気持ちを引き出す発問をしていく。

指導過程	価値形成過程	発問の基本型
(事前) 導入	体験や経験	・どんなことがあったか。どんな気持ち(考え)を持っているか。
	問題性	・なぜそうしたのか。
展開前段	葛藤性	・どちらをとるか。なぜそうするのか。
	価値指向性	・話合いを通して考えたことは何か。
展開後段	持続性	・今までの自分は、どんな気持ちでいたか。これからどうありたい(したい)と思うか。
	感動性	・どんな気持ちを持ったか。

(6) 体験を生かした道徳的価値形成を図る指導過程の基本構想

表2 体験を生かした道徳的価値形成を図る指導過程の基本構想

指導過程	道徳的価値形成過程	内面化過程	学習内容	発問	具体的な手だて
事前			○日常の体験で、本時で指導する内容についての自分の体験(できたことできなかったこと。その時の気持ちやなぜできなかったか。)をワークシートに書かせる。		ワークシートへの体験の記録
導入	問題性	意識化	○体験をふまえて、自己の道徳的な問題意識を掘り起こし、他者の道徳的な体験にも触れさせる。 (本時で指導する内容について)どんなことがあったでしょうか。なぜできなかったのですか。		ワークシートを基に、自己の道徳的問題に気付かせる
展開前段	葛藤性	追体験化	○「話合い」を行う事により多様な価値観に出会う。その中で他者の考えと自己の考えを対比させる。 どちらをとりますか。なぜそうするのですか。 話合いを通して考えたことは何ですか。		自分のこととして考えさせる葛藤場面設定
	価値指向性	主体化			道徳的価値について深くえささせるための「話合い」
展開後段	持続性	生活化	○改めて自分の感じ方や考え方を持つ。 今までの自分は、どんな気持ちでいましたか。これからどうありたい(したい)と思いますか。どんなことができそうですか。		ワークシートへの記録
	感動性	意欲化	○感動体験で実践意欲を高める。 どんな事を感じましたか。 どんな気持ちを持ちましたか。		実践意欲を持たせる感動資料や体験的活動
終末					

(7) 道徳的価値形成を見届けるための評価

児童の発言や記述内容を基に、児童の価値形成を見届けるために、表3の評価の視点により分析し、意識の状況を調べた。

表3 価値形成を見届けるための評価の視点

	評価の視点		
	A	B	C
導入	・本時で指導する内容(価値)について自分の体験を思い出し、自己の道徳的問題に気付いた。	・本時で指導する内容(価値)について自分の体験を思い出したが 自己の道徳的問題に気付いていない。	
展開 前段	・二つの視点に立って考え、理由付けが心情まで深く考えている。	・二つの視点に立って考えているが、理由付けが心情まで至らず、表面的である。	・自分だけの一方的な視点で気持ちや考えを想起した。
展開 後段	・本時で指導する内容(価値)についての自分の問題を振り返り、深められた価値を生活の中に生かしていこうとする考えが深まった。	・本時で指導する内容(価値)について自分の問題を振り返り深められた価値を生活の中に生かしていこうとする考えを持つことができた。	・本時で指導する内容(価値)について自分の問題をふり返ったが、導入時との変容が見られなかった。
終末	・本時で指導する内容(価値)について、実践しようとする意欲が高まった。	・本時で指導する内容(価値)について、実践意欲を持つことができた。	・本時で指導する内容(価値)について、実践意欲が見られない。

Ⅲ 授業実践

1 主題名 生あるものをいとおしむ 【3-(1) 自然愛、動植物愛護】

2 資料名 「ウミガメと花火」

3 主題について

(1) ねらいとする価値について

本主題は、項目3-(1)「自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にする。」を主な内容としている。これは、低学年の「身近な自然に親しみ、動植物に優しい気持ちで接する。」を受け、高学年の「自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする。」へと発展するものである。

「自然のすばらしさや不思議さ」は、ありのままの自然の景物に接する中で、あるいは理科の時間などでも気付かせることができる。人間が自然に心が動かされるのは、自然のもっている生命力や人工でない、まさにおのずからそのようになっている調和性を見とり感じるからである。

そして、その中で生命をもったものの生きる力がどんなに力強く躍動的であるかに気付かせることが重要であると考え。また、すべての生き物を「生あるもの」としてとらえ、その生活環境を守ったり、自然のままに生きる姿を温かく見守ったりすることは大切なことである。そのうえで生き物に対して自分たち人間に何ができるかを考え、行動しようとする態度を養うことで、動植物愛護へとつながっていききたい。

(2) 児童の実態 (省略)

(3) 資料について

本時の資料は、地域に住む小林さんのお話を基にした自作資料である。小林さんは、5月から8月の時期に、糸満の海岸に産卵するウミガメを守るために活動している「亀人会」の一人である。特に夏休みは、週末になるとビーチパーティーのグループや家族連れが多く、海岸でのウミガメの産卵やふ化を保護するため、そのグループに花火や明かりを消すようお願いしている。しかし、理解してくれるグループもいるものの、聞き入れてくれないグループがほとんどであるという。そればかりでなく、ごみを置いて帰るグループも少なくないようである。

本資料は、近所の子どものリーダーである主人公が中心になり、自分たちで考えた花火大会をするためにみんなで空き缶集めをする。そして、いよいよビーチパーティーで花火大会をしようとした時、小林さんがきて、花火をやめるように、主人公のお父さんにお願いをする。でもお父さんは、せっかく楽しみにしていた花火だからと小林さんに説明する。小林さんが去った後、お父さんに、どうするか聞かれた主人公が、花火をやるかやめるかを考えるという設定になっている。

自分が主人公のぼくだったらどうするか考え、話し合いをした後に、資料の中に出てくる小林さんに実際に登場して「話し合い」に参加してもらい、どうしてやめるように言ったのかを理解させる。そして、ウミガメの産卵やふ化の様子やそれにかかわる体験などを話してもらう。

本資料の着眼点は、花火をやるかやめるか自分なりの理由を基に考え、話し合いをもった後、実際に小林さんにきてもらい、話を聞くことによって、ウミガメの生命力や不思議な力を感じ取り、生あるものをいとおしむ小林さんの生き方に触れるところにある。そして、自分たちの住む地域の自然に目をむけ、具体的な事物事象を通して、生活の中で自然や動植物を大切にし、生あるものをいとおしむ態度を育てたいと考える。

(4) 指導観

本時の授業に向けて、「事前」に自然体験や動植物を大切にしたい体験やできなかった体験をワークシートに書かせて、実態把握をする。そして、「導入」で、ワークシートに書いた体験を基に自己の道徳的問題に気付かせる。

「展開前段」で、児童が夏休みによく行っているビーチパーティーという身近な素材を自作資料として教材化することによって、自己の体験と関連づけて考えさせる。また、葛藤場面でリーダーとしての責任をとるか、動植物愛護をとるか、自分のとるべき行為とその理由を考え「話し合い」をする。そして、ウミガメの保護をしている小林さんの話を聞き、小林さんの生き物に対するより高い価値に触れることによって、道徳的価値形成への方向付けができると考える。

「展開後段」で、導入でとらえた自己の道徳的問題を振り返り、これから自分なりにできそうなことをワークシートに記入する。

「終末」で実際にウミガメに触れ合う体験を行い、感動性を与えることで、道徳的価値に対する実践意欲を高める。

本時は、小林さんに話をしていただいたり、ウミガメに触れる体験を取り入れるために、60分授業に設定した。

4 本時の学習

(1) ねらい

精一杯生きている動物の姿を知ることにより、生き物のすばらしさや不思議さに感動し、生あるものをいとおしむ態度を育てる。

(2) 授業仮説

体験を生かして道徳的価値形成を図る指導を次のような手だてで行なうならば、児童が道徳的価値を自らのこととして受け止め、道徳的価値の自覚を深めることができるであろう。

- ① 「導入」で、自然のすばらしさや動植物を大切にしたい経験、大切にできなかった経験を掘り起こし自己の道徳的問題としてとらえさせるため事前に書かせたワークシートを活用する。
- ② 「展開前段」で、自分のこととして道徳的価値について深く考えさせるために、児童の体験に関わらせた自作資料に葛藤場面を設定し、実際に活動している小林さんに参加してもらい「話し合い」を取り入れる。
- ③ 「展開後段」で、導入でとらえた自己の道徳的問題を振り返り、道徳的価値を主体的に自覚させるために、これから自分なりにできそうなことをワークシートに記入する。
- ④ 「終末」で、道徳的価値に対する実践意欲を高めさせるために、ウミガメに実際に触れる感動体験を行う。

(3) 準備（省略）

(4) 展開

過程	学習活動(主な発問と予想される児童の反応)	○指導上の留意点 ★仮説の検証
導入	1 自然の不思議さや生き物とのかかわりの中で、自然や生き物を大切にしてきたことや大切にできなかったことを思い出させる。	★事前に行った自然や生き物とのかかわりの中で体験した出来事やその時の気持ちを基に、自分の動植物愛護にかかわる問題性に気付かせる。
3分	・幼虫を成虫まで育てた。 ・餌をあげるのを忘れて死んでしまった。	
展開	2 「ウミガメと花火」を見て話し合う。 どうして僕はまよっているのですか ・花火はやりたい。でも、ウミガメが卵を産めなくなる。 ・花火をやめるように言われたとき、あなたが、ぼくの立場だったらしますか。そのわけも書きましょう。	○楽しみにしていた花火をやろうとしていた時、ウミガメの産卵のために花火はやめてほしいといわれた。花火をやるかウミガメのためにやめるかまよっている主人公の気持ちに気付かせる。 ★葛藤場面で、自己の問題としてとらえさせるために、自分だったらどうするかを考えさせる。
前段	花火をやる ・せっかくみんなでかきで買った花火だからもったいない。 ・花火をしてみんなで楽しみたい。 ・ウミガメがたまごを産めなくなるのは、かわいそうだけど、花火を少しだけでもやり、リーダーとしてみんなをよろこばせたい。	花火をやめる ・やったら、おじさんにおこられそうだからやめる。 ・自分たちが花火をやって、ウミガメがたまごを産めなくなったら困るから。 ・おじさんが、みんなにお願いしているのは、ウミガメのためを守るためだからぼくたちもきょうりょくしよう
40分	◇ 小林さんに、「話し合い」に参加してもらいどうしてやめるように言っただかを話してもらおう。 ◇ 小林さんに体験を基に自分の考えや感動を話してもらおう。 今日のお話で大切なことは何でしょう。 ・自然を守る。 ・生き物もぼくたちと同じように生きているんだ。	★小林さんの話を聞き、花火がウミガメの産卵に障害になっていることの理解を深める。 ○ウミガメの産卵の様子を見ることにより、生命の尊さや力強さ、自然の大切さに気付かせ、自分たちが花火をやめることでカメの仲間が増えることを実感させる。 ★生あるものをいとおしむ小林さんの気持ちを実感させ、価値の理解を深める。
展開後	3 自分はこれまで動植物に対してどうだったのか。これから何ができそうかを考える。 これまでの自分を振り返り、これまでの自分は、生き物に対してどんな気持ちでいたのか。これから自然や動植物を大切にするため自分ができそうなことは何でしょうか。 ・生き物をもっと大切にしよう。	★導入でとらえた自分の道徳問題を振り返り、自然や動植物を大切にするため、これからの自分をよりよくしていこうとする意識付けをする。
10分		
終末	4 ウミガメに実際に触れ合う。 実際にウミガメに触れてどんなことを感じましたか。	★実際に生きているウミガメに触れ合うことにより、道徳的価値に対する実践意欲を高めさせる。
7分		

5 授業仮説の検証

表4は、授業仮説について、観察者が見た学級全体の評価とワークシートの記述からの評価である。その結果を基に分析及び考察をする。

表4 検証授業の観察者が見た学級全体の評価とワークシートでの評価 (31人中)

	観察の視点<A良い Bおおむね良い Cあまり良くない> (方法:発表,表情,つぶやき,ワークシート)	観察者の評価	ワークシートからの評価(P5表4参照)		
			A	B	C
1	導入で、動植物愛護に関する自分の道徳的問題に気付いている。		100% (31人)	0% (0人)	
2	葛藤場面において、自分のこととして考え、話し合い、道徳的価値について深く考えることができたか。	A	42% (13人)	55% (17人)	3% (1人)
3	導入で気付いた自分の問題を振り返り、大切にしようとする気持ちが深まり生活の中でどう生かしていくか考えを持つことができたか。	A	48% (15人)	52% (16人)	0% (0人)
4	ウミガメに触れ合う活動を通して、道徳的価値に対する実践意欲が高まっているか。	B	55% (17人)	26% (8人)	19% (6人)

事前にワークシートに本時の内容に関する体験を書かせることにより、全員が体験の中で自己の道徳的問題に気付く事ができた。また、導入で全員の体験や道徳的問題をまとめて提示することにより、他の人の道徳的問題を知り、お互いにどのような体験や道徳的問題があるかを確認することができた。

花火をやめるか、やめないかの葛藤場面では、97%が道徳的価値について考えを持つことができ、ワークシートではたくさんの理由づけられた記述があった。「話し合い」では、自分とウミガメの2つの視点に立って考えている児童（42%）の発表や小林さんの話などからも動植物愛護に関する道徳的価値について深く考えることができたといえる。

展開後段では、全員が導入でとらえた自己の道徳的問題をふり返った記述でき、これから生活の中でどう生かしていくか、考えを持つことができたといえる。

終末では、児童の表情やつぶやき、ワークシートの記述から81%の児童に本時で指導する内容（生あるものをいとおしむ）について実践意欲がみられた。

以上のことより、道徳的価値の自覚を深めることができたといえる。

IV 研究の考察

「道徳的価値の自覚を深める道徳の授業の工夫」として、「体験を生かして道徳的価値形成を図る指導」が、有効であったかどうかを検証するために、4回の指導実践を行い、児童の発言やワークシートの記述内容等をP 25 表 3「価値形成を見届けるための評価の視点」を基に分析し、考察を行った。

1 「導入」で、事前に書かせたワークシートを活用することで、自己の道徳的問題をとらえることができたか。

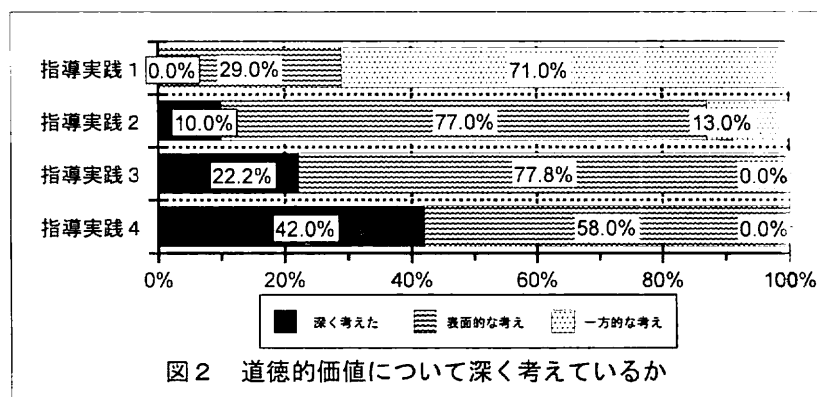
表5は、事前に書いた児童「体験」の記述例である。このように、本時で指導する内容（価値）にかかわる「体験」を書かせることで、自分の道徳的問題としてとらえることができた。また、自分にも同じような体験があることで、資料の内容理解につながることができた。「体験」の書き方も、実践指導2以降からは、より深く心を見つめ、心情面まで記述できるようになっている。

表5 事前にワークシートに「体験」を記述した主な例

指導実践1(勤労・努力)	指導実践2(友情)	指導実践3(思いやり・親切)	指導実践4(動植物愛護)
・テレビを見ていたので家の手伝いができなかった。 ・難しくて算数の勉強をあきらめた。	・忘れ物をしたとき教科書を見せてもらった。 <u>次から忘れ物をしないようにしようと思った。</u> ・もんくを言われて <u>バカにされてるみたいだったから言い返した。</u>	・鉛筆を貸してあげた。 <u>とってもいい気持ちになった。</u> ・友だちが鉛筆を落としたのに拾えなかった。 <u>けんかをしたから拾えなかった。</u>	・チョウを幼虫から成虫に育てることができて <u>とってもうれしかった。</u> ・ <u>えさをあげるのを忘れてコオロギを死なせてしまった。</u>

2 「展開前段」で、葛藤場面を設定し「話し合い」を取り入れることで、道徳的価値について深く考えることができたか。

図2は、ワークシートの記述を基に、「道徳的価値について深く考えているか」について、分析した結果である。指導実践1では、道徳的価値について深く考えた児童が0%であった。指導実践2では10%、指導実践3では22%、指導実践4では42%と徐々に増えている。その理由として、指導実践2以降は、葛藤場面を取り入れ、発問を工夫したことで、なぜそのような行為をしたのか、主人公の気持ちや他の登場人物の気持ちに立って考えられるようになったからだと思われる。



さらに、実践3、4では、話形や簡易アナライザー、座席の工夫などをし、話し合いを進めた結果、話し合いが活発になった。資料2は、指導実践4の「話し合い」の授業記録である。児童は一人(C6)をのぞいて全員が花火をやめるという意見になった。そこでT②のような補助発問をした。そのことで、花火をやめると言った児童も花火をやりたいというC6の気持ちと同じように、自己中心的な気持ちが自分の中にもあることに気づき、それでも正しく生きようという価値を指向していた。このように、「話形」にそって、自分と他人の意見を比べながら発表することや、話し合いの中で補助発問を工夫することで多様な価値観に出会い、自分とウミガメの2つの視点に立って道徳的価値について深く考えることができたといえる。実践4では、「話し合い」の後半小林さんの話を聞くことにより、ウミガメの立場になって生あるものの大切さ尊さを実感し、より動植物愛護についての道徳的価値の深まりが見られた。

- T① あなたが、主人公のぼくだったらどうしますか。**
- C1 ぼくは、花火をやめます。わけは、ウミガメが卵を生むし次までがまんします。
- C2 わたしもC1さんと同じ考えで花火をやめます。花火がちってウミガメに当たったら危険だからです。
- C3 私も同じ意見です。ウミガメが卵を産む場所がなくなったらかわいそうです。
- C4 私もやりません。花火はいつでもできるからウミガメのことを考えないといけないと思います。
- C5 ぼくは一度生き物を殺してしまったことがあるから、あんないやな気持ちになりたくないからやりません。
- C6 ぼくは、みんなとちがって花火はやります。わけは、自分で働いて買った花火だからやりたいです。
- T② C6さん一人が花火をやるとい意見ですが、C6さんと同じような気持ちがある人はいますか。(ほとんど全員手を挙げる)**
- C7 私も自分で買ったせっかくの花火だし、しけつたらもったいないからやりたい気持ちは分かります。
- C8 でも、働いて買った花火だけど命はお金では買えない。
- C9 逆の立場を考えるといやな気持ちになる。自分たちがウミガメだったらいやな気持ちになると思う。
- (小林さんの話を聞く・省略)
- T③ 話し合いや小林さんの話からどんなことを考えましたか。**
- C10 ウミガメもひっ死にがんばっているんだなと思った。
- C11 動物も人間と同じなんだ。みんな生きているんだ。だから生き物を大切にする。
- C12 マナーが大切だなと思った。

資料2 指導実践4の「話し合い」の記録

3 「展開後段」で、改めて自己の道徳的問題を内省し、ワークシートにこれからの生活の中でどう生かしていくかを書かせることにより道徳的価値を主体的に自覚できたか。

図3は、ワークシートの記述から道徳的価値を主体的に自覚できたかについての評価を分析した結果である。指導実践1では、自己を内省した記述になっている児童が3%であった。しかし、指導実践2では、13%、指導実践3では、44%指導実践4では48%と増えている。理由として指導実践2から、児童の体験を事前にかける活動

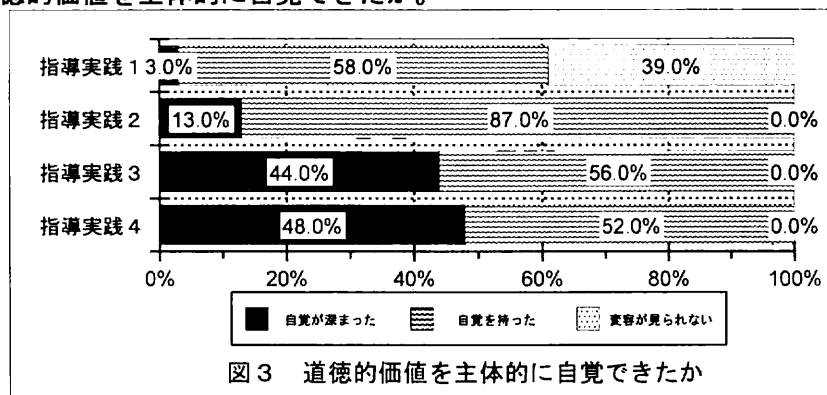


図3 道徳的価値を主体的に自覚できたか

を取り入れ、さらに、実践3、4では、ワークシートに「これまでの自分は、……。これからの自分は、……。」という自己を振り返るキーワードを入れ、記述させたことで、自己の道徳的問題を内省し道徳的価値の主体的自覚ができたと考える。

資料3は、A児とB児の事前にかけた本時の内容に関する体験と展開後段でのワークシートの記述である。展開後段で、事前にかけた自己の体験にかかわらせて、改めて自己の道徳的問題を内省することができ、深められた道徳的価値をこれからの生活の中で生かしていこうとする気持ちが読み取れる。

	事前に書かせた体験の記述	展開後段での記述
A 児	疲れるので、おかあさんの荷物をもってあげなかった。 (実践指導3)	今まで自分は、親切ができなかった。でも、これからの自分は、人が大変なときや困ったときは助けてあげようと思う。
B 児	クワガタを入れた虫かごの土に水をどれくらい入れていいかわからず、あまり世話できなかった。水かげんは、難しい。(実践指導4)	今までの自分は、生き物をころしたりしていた。これからは、世話をし てやるぞ。世話をするのは難しいけど、自分の生き物だもん。

資料3 事前・展開後段でのワークシートの記録

4 「終末」で感動体験を取り入れることにより道徳的価値に対する実践意欲を高めることができたか。

図4は、ワークシートの記述を基に、道徳的価値に対する実践意欲の高まりについて分析した結果である。指導実践1, 2, 3では、実践意欲の高まりにあまり変容が見られなかった。しかし、指導実践4において大きく変容し、61%の児童に実践意欲の高まりが見られた。この結果より、指導実践1,

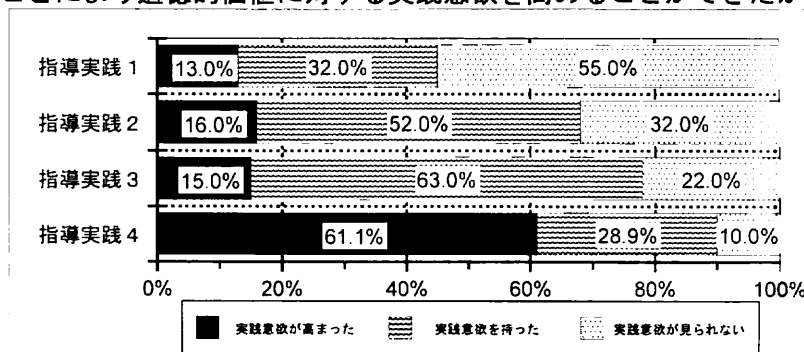


図4 道徳的価値に対する実践意欲を高めることができたか

2, 3は、終末が教師の説話で終わっていたため実践意欲に高まりが見られなかった。しかし、指導実践4に感動体験（ウミガメに触れる）を取り入れたことにより、本時のねらい（生あるものをいとおしむ気持）の実践意欲が高まったものと考えられる。授業後の、小林さんへのお手紙（資料4）からも実践意欲の高まりが読み取れる。

児童C:ゴミを捨てたりするのは、ウミガメに危ないんだと分かりました。これからは、ゴミは、ちゃんとゴミ箱に捨てます。

児童D:私は、こどもの日はキャンプに行くって決まっていますので、花火はしないようにします。知らない人のゴミもとるようにします。

資料4 小林さんへの手紙

以上の結果より、児童は、「導入」で自己の道徳的問題に気づき、「展開前段」で道徳的価値について深く考え、「展開後段」で道徳的価値を主体的に自覚し、「終末」で実践意欲を高めることで、道徳的価値の自覚を深めることができたと考ええる。

V 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 事前にワークシートに本時で指導する内容について体験を書かせ、「導入」で活用することにより、自己の道徳的問題に気付くことができた。
- (2) 「展開前段」で、葛藤場面を設定し、「話し合い」を取り入れることで、自分のこととして考え、話し合いの中で、ねらいとする道徳的価値について深く考えることができた。
- (3) 「展開後段」で、ワークシートを工夫し、生活の中でどう生かしていくかを書かせることにより、自己の道徳的問題を振り返り、道徳的価値の自覚を深めることができた。
- (4) 「終末」で感動を与える体験的活動を取り入れることにより、道徳的価値に対する実践意欲を高めることができた。

2 今後の課題

- (1) 児童の体験を生かした自作資料の作成と「展開」での有効な人材活用の仕方
- (2) 総合単元的な道徳学習における体験を生かした道徳的価値形成を図る指導の工夫

<主な参考文献>

廣川正昭著 『これからの道徳教育』

ぎょうせい 1992年